人が人を育てる

～0 歳児集団生活は人生の宝物～

園名　　氏名

こども園 ゆりかご　　山木　直香

私は、園で生活する０歳児の小さなこどもたちが、たくさんの人々に囲まれて暮らす中で、人に対して自然発生的にたくさんの力が芽生える様子を日々見出したことから、これらの力が将来の幸福度につながるのではないかと考え始めた。園の暮らしのならでは人と人との豊かな関わり合いにたくさん心打たれ、人って素敵、人が人といることで自然と人を好きになる、すなわち人が人を育てる、人生の宝物の時間であると実感している。

そこで、0 歳児の子どもたちのもっている力を可視化し、経験していることを多くの人に知ってもらうことを本研究の主たる目的とした。

実際にどのような 0 歳児の姿があり、どのような環境がその力を生み出しているかを検証したい。

人が人を育てる

～０歳児集団生活は人生の宝物～

こども園 ゆりかご　山木　直香

Ⅰ　はじめに

園で生活する０歳児の小さな子どもたちは、たくさんの人々に囲まれて暮らしている。私は、その中で、人に対する自然発生的な力が日々芽生えていると感じたことから、この力はなんだろう？将来の幸福度につながるのではないか？と考え始めた。

０歳児の子どもたちのもっている力や経験していることをたくさんの人に知ってもらいたいと考え、それらの可視化をこの研究の目的とする。実際にどのような０歳児の姿があり、どのような環境がその力を育んでいるのかを日々の保育におけるエピソードから検証する。

期間：2022 年４月～１年間（2023 年４月～１年間）
対象者：社会福祉法人ゆりかご　こども園 ゆりかご　０歳児クラス（くすのき組）12 名（担任４名）
倫理的配慮： 園児は全て仮名とし、個人情報の保護を厳守する。写真使用の子どもたちの保護者には承諾確認した。

〈園の概要〉社会福祉法人ゆりかご　こども園 ゆりかご　 1950 年創立

京都市右京区、大本山妙心寺の中にあり、四季折々の豊かな自然を楽しめる。幼保連携型認定こども園　園児数 162 名

子どもが経験すること２つ、愛されることと愛すること。小さな子も大きな子も障がいのある子ない子も、一人ひとり違って当たり前。助けられたり、助けたり、自分にないものはもらったり、あるものはあげたりしながら、一人ひとりの、一つひとつの違いをそのままで受け入れることを大事にしている。

〈0 歳児保育において人との関わりについて大事にしていること〉

①毎朝、保育室に保護者は入室し、準備をする時間がある。子どもがいるなかで保護者と保育者がしゃべり笑い合う時間を大切にしており、それは、我が子以外の子どもと保護者の交流時間にもなっている。

→そのことが安心できる場所・人につながる。

②朝別れがつらくて泣いていても、顔を見て、イッテラッシャイと扉から出て行く保護者を担任と一緒に見送る。０歳児の記憶に、またこの扉から必ず迎えに来てくれるという事実を

重ねる。保護者には決して機嫌よくあそんでいるうちにこっそり行くことはしないようお願いする。慣れると機嫌よく別れられるようになる。
→子どもと保護者との信頼関係が崩れないよう、更に深まるように心がけている。
③「お帳面」で家庭の様子や生活時間の詳細記入をお願いしている。
→家庭とのつながった生活を重視し、細かい情報交換で保護者と子どもの姿を共有する。嬉しいことも困ったことも一緒に喜び一緒に悩み、共感することで保護者の安心にもつなげる。
④大人と子どもの「一緒ごはん」を基本にしている。おうちの人ごはん(入園して最初のごはんは親子ごはん)にも配慮し、 また、食事は保育者も一緒に食べている。
→一緒に食することで人と人との関わりが深まることを重視している。食がもたらす人と人との親近感や協調性を育む。
⑤布オムツ・パンツ使用によって生理活動にすぐに保育者が共感する。保護者は洗濯物で子どもの排尿排便の量を知り、昼間の暮らしぶりを感じる。
→生きていくのに必要な排泄のその場での共感を大切にしている。
⑥お誕生会やおすもう大会など、０歳児から無理のない程度に園全体の行事に参加する。大きなお兄ちゃんお姉ちゃんが楽しんでいる姿、夢中な姿を同じ空間で感じる。
→大きなお兄ちゃん、お姉ちゃんの励みにもなり、また日々の関わりにもつながる。
⑦異年齢保育 縦割り保育「お手伝いマン」として、お手伝いにきてくれるお兄ちゃんお姉ちゃんと生活遊びを一緒に楽しむ。
→異年齢の子ども同士の関わり方、関係を深める。
⑧みんな担任のような保育をしている。担任以外のいろいろな保育者にも関わられ、関わる経験を重ねる。保育者同士も情報交換し、助け合うことが自然に出来ている。
→子育てを協力し助け合うように、保育も協力し助け合うことが出来る。

〈０歳児保育に対する考え〉
　小さな０歳児を預かる保育施設は、家庭に保育する人がいないからといった理由で、単なる子どもを預けておく場所なのだろうか。いや、私は、選んででも、人と人との関わりの宝庫として我が子が過ごしてほしい場所であると考えている。アメリカのアベセダリアンプロジェクト（注１)の研究において、０歳児集団保育の経験者は将来幸福度が高いと言われる。それを納得させる０歳児の人と関わる力が園には存在するからだ。

II　エピソードと考察
　2022 年４月、０歳児クラス 12 人、担任４人での暮らしがスタートした。私は園を第二のおうち・親子で選んでもらった居場所と捉えており、日々保育をしている。それは、すなわち一緒に暮らしていることと同義であるとも考えられる。 12 人は、２ヶ月半の子どもから 11 ヶ月（４月生まれ～１月生まれ)の、０歳児の学年としては最大の月齢差の子どもたちが入園してきた。さぁ、どのように一緒に暮らしていこうか？そう思ってさまざまな環境づくりを準備することになった。

(1) ちっちゃい人いるのシッテルヨ

〈クラスの様子〉

2022 年４月満２ヶ月～満 11 ヶ月の０歳児の子どもたち 12 人が一緒に過ごす保育室。慣らし保育中で、不安も高く、少しずつ慣れてきている新年度４月半ばの０歳児クラスである。

〈エピソード〉

朝、保護者とのイッテラッシャイで涙の別れをする高月齢児。その子どもたちも、しばらくすると、泣き止みハイハイで好きなところに動いたり、おもちゃに興味を示し, 手を伸ばしたり、遊び始める。

低月齢児の子どもたちの側に近寄った時は、保育者同士声をかけあい、そばで危険のないように見守る。「〇〇ちゃんやねぇ。おはよう。」などとその子が目を向けている先に気付き、言葉を添えるなどしていた。そんな時、高月齢児が自然とハイハイで、仰向けの低月齢児をよける、立ち止まる、まるで“ドーゾ”というようにそばにおもちゃを置く姿が見られた。しかもたくさんのおもちゃの中から、保育者が低月齢児によく渡していたガラガラのおもちゃを選んで、片手に握りハイハイで持ち運んでいたのだ。

小さなお友だちに気をつけるよう促したり導いたりしていない中での子どもたちが自ら起こした行動に、保育者全員びっくりする。みんなで喜び、子どもたちにも「ありがとう」と伝える。

〈考察〉

０歳児は、こんなに小さくても他の存在に気付き、ハイハイでよけたり、おもちゃを選んで届けたり、自然発生的な行動する力や保育者の姿を見て同じことを再現する力を持っている。

一般的に発達心理学で向社会的行動が見られるのは１歳半～２歳ごろの子どもと言われるが、おもちゃを渡した子は 11 ヶ月、１歳未満の子どもだった。これは新しい発見で、それだけ小さくても向社会的行動の初期の表れだと言える。自分より小さな人がいることで、引き出される力なのであろう。

４月はまだ高月齢児の歩行が確立しておらず、動きもゆっくりしているこどもたちが多かったので、安全を確認しながら低月齢児用ベッドを使用せず生活をスタートさせていた。ベッドで居場所を区切るのではなく、同じフロアで普段から一緒に過ごしているからこそ、見られた姿であり、環境が生んだ姿だといえる。

(2)自然に“イッショ”を楽しむ

〈クラスの様子〉

2022 年６月。入園して２ヶ月、担任とも信頼関係ができ、安心して過ごせる毎日。担任４人と 12 人の子どもたちは、人と人との関わりが密になり、毎日の暮らしを楽しんでいる。

〈エピソード〉

うつぶせのＫちゃんにハイハイで寄っていくＹくん。(写真①)　抱っこされているＵちゃんの目を見に行くＳくん。(写真②)　うつぶせのＥくんに歩いて寄ってきて、同じように寝転び、目をあわせ、見つめるＣちゃん。(写真③)

０歳児同士の関わりがたくさん見られるようになった。目を合わす、それも目が合うように自然に自分の体勢をかえて合わせる。本当に人が好きで“イッショッテ　ウレシイネ”と言っているような姿に保育者も「好き～好き～。一緒やね」と言葉をかける。

写真①

写真①

写真②

写真③

〈考察〉

家庭にいたら、これほど豊かに０歳児同士が自然に目を合わして、触れる“イッショ”を経験できるだろうか。人はそばにいると、自然と人に寄っていく。園の集団生活では、お互いがいるからこそ経験できる“「イッショ」は楽しい嬉しい人と人との関わり”の豊かさが見られる。

(3)やさしさ返し

〈クラスの様子〉

2022 年 11 月。みんなが動けるようになった秋の０歳児クラス。それぞれ 12 名全員が ハイハイや歩いて自分の好きなところに移動し、興味があるものや人に触れたり、そばに行くようになったりしている。

〈エピソード〉

１歳半を過ぎた H ちゃんは自我が発達し、“イヤイヤ～”と怒って床にひっくり返り自己主張をたっぷりするようになった。その姿に、ハイハイで集まり笑うでもなく怒るでもなく寄り添うように一緒にいる低月齢児たち。H ちゃんの顔を見つめなぐさめているようにも見える。そこには優しさの空気感を感じる。

〈考察〉

自分たちがまだ移動できない春頃に寄り添ってもらっていたように、低月齢児が自ら泣いている H ちゃんの側にハイハイで行くのは、以前にやさしくしてもらった分、やさしさのお返しをしているのではないか。寄り添う気持ちが伝わり、真似て、受け継がれているのである。感情的になっている人に自ら近づいて寄り添う。この向社会的行動も１歳未満の子どもの姿である。この姿もこの仲間がいるからこそ、引き出された０歳児の力である。やさしさが受け継がれており、連鎖しているのだといえる。

(4)お世話したい気持ち

〈クラスの様子〉

2023 年１～２月。年が明けて、いろいろな「まねっこ」いわゆる模倣があちらにもこちらにもいっぱい、小さな保育者のような高月齢児の姿がたくさん見られ、子ども同士の関わりが更に膨らむ。

〈エピソード〉

とにかく「まねっこ」が大好き。保育者や、お兄ちゃんお姉ちゃんのように、寝ころんでいる友だちのそばに座っておなかをトントンしたり、洋服の着替えに手を添えたり、靴をはかせることはできないものの足のほうに靴をくっつけようとしたり、高月齢児が低月齢児の世話をしたがる姿がたくさん見られる。高月齢児がご機嫌ななめの時に小さい人のミルクが出来上がると、泣いて怒っていてもひっくり返っていても急いで起き上がり、哺乳瓶に手を添えにきて、ミルクをあげるお手伝いをし、やさしい表情で関わる子どもたちである。

〈考察〉

小さな０歳児でも、生きる力の原点“誰かのために”という思いや姿が見られ、それらは自分の気持ちをコントロールする力にも影響している。 誰かが誰かのためにしていることを見て、自分の体で再現している。また、自分がしてもらって嬉しかったことや心地よかった経験をたっぷりため込んで、次は自分が〇〇のためにと自然に行動する向社会的行動が次々と展開されている。

Ⅲ　保育における人との関わり

2022 年度は偶然月齢に幅がある集団になったことで、潜在していた０歳児の人に対する素敵な力がみられた。しかし、０歳児同士の関わりだけでなく、同じように異年齢の関わりの

中にも、０歳児の持っている力を引き出し、ため込む時間と感じることが園の暮らしの中にはたくさんある。

(1)　異年齢の関わり（０歳児～５歳児の関わり合い）

本園では、大きなこどもたちが、普段の生活の時間に小さなクラスに本人の希望で訪問し、「お手伝いマン」という名でお手伝いしてくれたり遊んでくれたりする機会や時間を大事にしている。その他にも、異年齢で散歩に行ったり、行事に全年齢で参加したり、異年齢縦割り保育を古くから行っている。

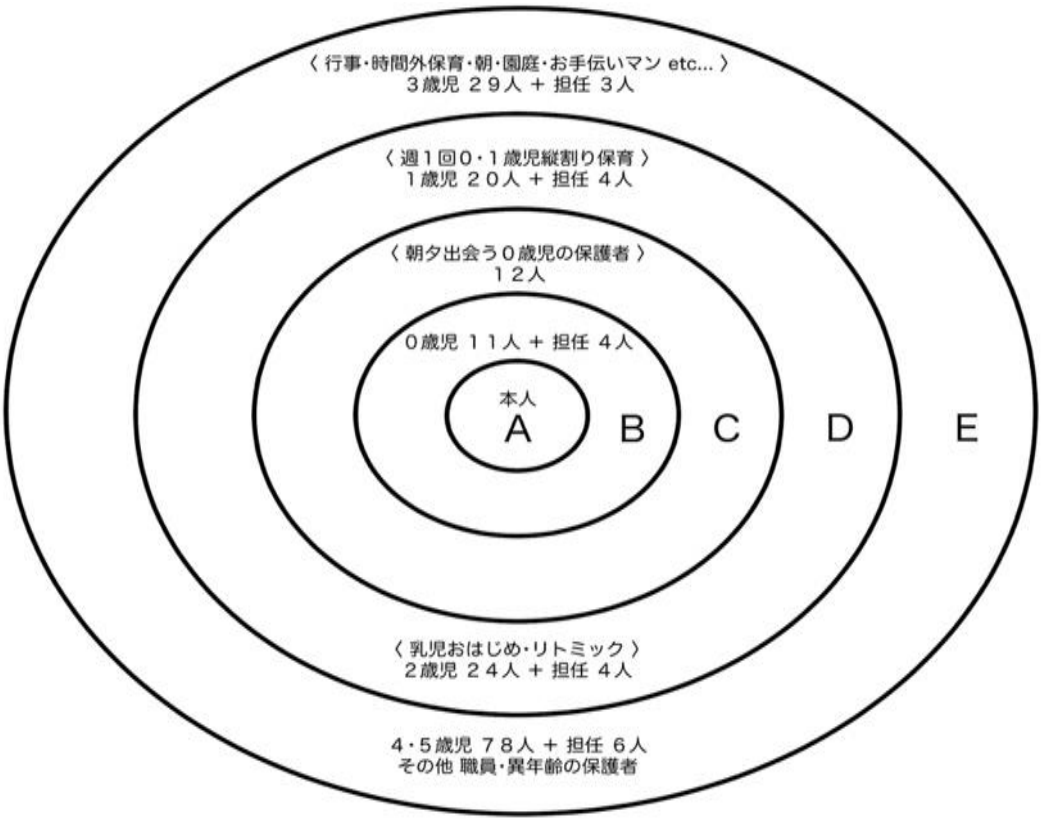
幼児は、低年齢児をお世話したい気持ちではりきる。そして自信が膨らむ。見られたり模倣されたりする心地よさをたくさん感じると同時に、乳児の存在に心から癒されてもいる。

０歳児期は、関わられ、人の温かみや優しさを感じため込む時間なのであろう。見て吸収し、模倣して共感共有の感情が膨らむ。いずれ、そのため込んだ優しさや力が次の乳児に発揮されるのである。

(2)園生活で人と出会う

それでは０歳児は園の生活でどのくらいの人と関わっているのだろうか。以下のような図で表してみた。

園生活　生まれて１年　　こんなに人と出会っている



A：一人の０歳児

B：日中一緒に過ごす一番身近な 15 人の子どもたちと保育者

C：朝夕に出会う自らの保護者も含む 12 人の保護者

D：週一回礼拝やリトミック、その他の遊びにおいて０１２歳児縦割り保育で過ごす 52 人の子どもたちと保育者。

E：行事や普段の朝園庭、「お手伝いマン」を始め長時間保育で一緒に過ごす 117 人の３４５歳児の子どもたちや保育者

その他担任以外の職員や異年齢の保護者

実に 220 人以上の人々との関わりの中で暮らしているのである。

保育の場では、これだけの多人数と関わるチャンスがあり、いろいろな人に囲まれた豊かな暮らしが保証されているのだといえる。

Ⅳまとめと今後の課題

人間の０歳児は、白紙である(タブララサ)と言われることがあったが、その白はさまざまな色を描いていける、つまりさまざまな経験をこれからしていけるという意味の白であり、

単なる無色の白ではない。確かに人間は生理的早産で生まれて、しばらく一人では生きられないとても未熟な乳児期過ごす。人の関わりによって哺乳され、誰かの力を借りないと死んでしまう動物である。そんな段階からスタートする０歳児の泣きの要求を予想し代弁し、周りの大人が語りかけ一生懸命世話をする。そのうち０歳児は目が合うと笑い、人の関わりで要求が満たされる幸せを繰り返し感じると人への関心は膨らむ。そして自ら動けるようになると、生まれてわずか半年ほどの時期だが、そんな自分を幸せにしてくれる人の存在に気づき認識し、興味を示し近寄り、触れるのである。

０歳児は、集団生活でたまたま出会った同い年の仲間のことやまわりの人を、自分を心地よくしてくれる相手と同じかも？！とその存在に気づき興味を示し、好意をよせ、大事に思う気持ちが芽生えているのかもしれない。自然と人に近寄り、触れ、一緒の時間が増えるとその人を好きになる。また、きれいな輝いた目で見たものをしっかり自分の脳に記憶し、再現する力を生まれつき備えているのではないかと日々の保育実践から感じている。０歳児の力はすごい。それを身体の運動発達と共に私たち大人に行動で見せ教えてくれるのである。

そして、それは成長と共にどんどん模倣という形で周りにわかるように表されることが増える。模倣の行動により、自発的に同じことができた達成感、充実感、幸福感を感じ、模倣される側も模倣された事による共感が増える充実感、幸福感を味わうことができる。どちらも心地よい時間を一緒に味わっているように見える。模倣は人がいないと始まらない行動であり、優しさ返しに見える姿もその一部である。

生まれてすぐ、人によって関わられて心地よい時間を過ごす、更に人といると楽しいという幸福感を味わう。そんな豊かな暮らしのなか、人を想う力が育ち、時には自分の心をコントロールし、人のために何かをする行動をも自然と起こす。大人の振る舞いのような姿を見せてくれる０歳児であるが、それらが感情を作り上げる前段階であることは明らかだ。そして、それは人がいないと生まれない力であり、そこに人が人を育てる営みの重要性や可能性が存在する。

実際に、０歳児が一年経つと、担任なしでこどもたちだけで、手を繋ぎ輪になり楽しむ姿があった。手の繋ぎ加減、触れ合い加減、人と人が関わる力が見事だった。

一方で、その自然発生的に見られる力を生み出し引き出す環境づくりも大切である。周りの人が人を好きで人を大事にしながら過ごすこと。人と人との接点づくり、０歳児の時からたくさんの人と関わり合いができる機会や時間の保障が何より大切であろう。そして、そこに必要なのは、日々の暮らしを丁寧に積み重ねながら、ひとつひとつのことをたっぷりと経験

していくこと以外の何ものでもない。AI では決してできない人と心と心を通わせる体験を幼い時にすること、そしてその経験を保障することを何よりも優先する環境づくりが、今後の社会の課題である。生きていくために必要な力、心豊かに生きていくための力、人への関心や思いやる力がどんどん膨らんで、10 年先、20 年先にこの小さな人たちが人とのつながりをさらに広げられるような社会をつくるために、今、自分自身が豊かな温かい関わりを大事にしたい。

子どもたちは、生まれて１年のこの時期にたくさんの人と出会い、暮らし、たくさんの力を使い始めている。この１年は、人生の宝物の時間だと言っても過言ではない。子どもの人生の貴重な時期に、安心できる家庭生活を営むと共にとともに０歳児集団生活を選択をした保護者に、私は拍手を送りたい。同時にどんな乳幼児もいろいろな人と豊かに関わる機会や居場所が、家庭以外にも持てる世の中になるよう今後も力を注ぎたいと考えている。

（注１)アメリカ　アベセダリアンプロジェクト結果
https://papaburo.com/abecedarian-project